

里浜づくり宣言

かつて浜は、貝を採り、海藻^{かいそう}を拾い、生き物を見つけたり、散歩し、海を眺め、精神的な開放を得たり、遊び、集い、伝統的な祭りを行うなど、人々の暮らしの中にしっかりと位置付けられた地域の共有空間でした。

しかし経済発展や人口増大に伴い、わが国の海辺は大きく変容^{へんよう}しました。

戦後、特に、我が国は、高潮、津波によって毎年のように甚大^{じんだい}な海岸災害^{こうむ}を被りました。そのため、防災を最優先の課題と考え、海岸線に堤防や護岸を築き、それにより、高潮や津波による脅威^{きょうい}を軽減することができるようになりました。しかし、その反面、これらの施設整備とあいまって、海辺の景観は一変し、供給^{ききょう}される土砂の減少などにより浜は痩せ、ゴミの散乱など環境も悪化し、海辺^{つちか}で培われた文化も失われていきました。こうして、海辺と人々とのつながりは希薄^{きはく}になってしまったのだと思います。

この反省にたつて、近年では、海辺の利用と環境に配慮するために、親水性や美しい景観、豊かな環境を海辺の重要な特長として捉え、これらの特長と防災機能の両立を目的とした整備が行われるようになりました。しかし、かつてのように人々の暮らしの中に海辺が再び身近になったとはいえません。

なぜでしょうか。

私たちは、その原因について、今行われていることが、いろいろな工夫^{こうりよ}や配慮^{ほりよ}がなされているにしても基本的には従来のようなものづくり中心の対策になっているからではないかと考えました。

では、どうしたらよいのでしょうか。

私たちの提案は、「日本の海辺を良くするには、何よりも海辺と人々のつながりを回復することから始めなければならない。」ということです。既に、各地で海辺と人々のつながりの回復に向けた取り組みが始まっており、これらを具体的な成果^{けつじつ}として結実^{けつじつ}させていく運動や各種の取り組みが必要です。

私たちは、ここに「里浜づくり」の推進を宣言します。

「里浜」とは、多様で豊かなかつての「海辺と人々とのつながり」を現代の暮らし^{かな}に適う形で蘇らせた浜のことです。また、「里浜づくり」とは、地域の人々が、海辺と自分たちの地域のかかわりがどうあるべきかを災害防止のあり方をも含めて議論し、海辺を地域の共有空間（コモンズ）として意識しながら、長い時間をかけて、地域の人々と海辺との固有のつながり^{つちか}を培い、育て、作りだしていく運動や様々な取り組みのことです。

この宣言は、里浜づくりを進めていこうとする私たち自らの決意を表すと同時に、国民各層に里浜づくりへの参加を呼びかけるものです。海辺に対する地域住民の関わり、専門家の役割、国や地方自治体の海岸行政^{てんかん}について、関係者の意識の転換^{てんかん}を迫るものでありま

す。この宣言が契機^{けいき}となって、里浜づくりが広範に展開され、全国各地に、地域の人々によって、豊かで美しい海辺が復活し、人々が海辺の豊かな文化^{きょうじゆ}を享受しながらいきいきと暮らす日が来ることを、また、このような海辺と文化が後世に伝えられ、島嶼^{とうしよ}国日本を象徴する海辺として美しい国土を形作っていくことを強く願います。

2003年5月 里浜づくり研究会

里浜づくり研究会メンバー

氏名	専門分野	所属
座長 磯部 雅彦	海岸工学	東京大学大学院教授
副座長 近藤 健雄	海洋環境計画学	日本大学教授
委員 清野 聡子	生態学	東京大学大学院助手
小島あずさ	海洋環境	クリーンアップ全国事務局代表
小埜尾精一	海洋環境	三番瀬研究会代表
齋藤 潮	景観工学	東京工業大学大学院教授
池田 薫	海岸行政	大分県土木建築部参事
諸星 一信	沿岸防災計画	国土技術政策総合研究所室長
上島 顕司	景観工学	国土技術政策総合研究所室長
鳥居 謙一	海岸工学	国土技術政策総合研究所室長